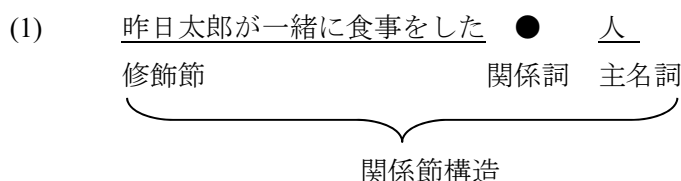


日本語関係節構造の類型性と語用論的制約

加藤 重広（北海道大学）

日本語における関係節の成立は、①節か句か区別が明瞭でないこと、②連体修飾（形容詞）節と連用修飾（副詞）節は明瞭な形態的対立がありながら、対立関係が単純とは言えない現象があること、③連体修飾を表示する形態素がないこと、④西欧語の関係節構造で見られない逸脱性があること、⑤統語的制約でなく、語用論的制約がかかること、など、論じるべき問題の多様性と関わっている（加藤 2001, 2003）。本論は、加藤(2003)の再考を行い、文構造や統語規則だけでなく、文脈による知識状態（の活性化）や推論・解釈も含めて用いて、両者を統合的に利用して分析するという「統語語用論」（加藤 2016b）の手法を用いる。分析方法としては、文法的分析に語用論的分析を重ねる手順を踏むことを原則とする。

ここで関係節と呼ぶものは、「昨日太郎と一緒に食事をした」という連体修飾節のことであり、その修飾を受ける「人」という主名詞¹と関係節を合わせた全体は関係節構造と呼ぶ²。関係節を成立させるために用いられる標識で修飾節にも主名詞にも含まれない形態素を関係詞と呼ぶ。



1 関係詞を持たないことと類型特徴

日本語には、英語に見るような関係代名詞の類はない。従って、関係詞の標示が義務か任意かということも問題にならない。Jae Jung Song(2001:216ff)は、the obliteration strategy（消去方式）/ the pronoun-retention strategy（代名詞保持方式）/ the relative-pronoun strategy（関係代名詞方式）の3つの方式を挙げ、日本語はトルコ語とともに obliteration strategy を取るとされている³。英語等印欧語の多くは関係代名詞方式をとり、代名詞保持方式を採る言語としてはアオバ語・キリバス語・ウルホボ語・ペルシャ語・アラビア語・ヘブライ語・ケラ語⁴などがあがっている。Song(2001:218-9)の例を引く⁵。

¹ ここでの主名詞は寺村(1993)で言う「底の名詞」で、連体修飾を受ける名詞を指す。なお、寺村(1993)は便宜上寺村(1975, 1977a, 1977b, 1978)をまとめて指すものとする（以下同じ）。

² 議論が混乱しないように、ここでは加藤 2003 と用語法を統一する。

³ Keenan and Comrie(1977, 1979)の提案した類型を継承したもの。

⁴ アオバ語(Aoban)・キリバス語(Gilbertese)はオーストロネシア語族、ケラ語(Kera)はアフロアジア語族（東チヤド諸語）、ウルホボ語(Urhobo)はニジェールコンゴ語族。

⁵ 略記は以下の通り。DO:直接目的語、GEN:属格、NR:名詞化辞、POSS:所有格、PST:過去時制。

(2) 消去方式 (トルコ語)

Orhan-in gör-düğ-ü adam cik-ti
 Orhan-GEN see-NR-POSS.3 man leave-PST

The man Orhan saw left.

(3) 代名詞保持方式 (キリバス語)

te mane are oro-ia te aine
 the man that hit-him the woman

the man whom the woman hit

(4) 関係代名詞方式 (ロシア語)

Ivan videl devušku, kotoruju Petr ljubit
 Ivan saw the girl who(DO) Peter loves

Ivan saw the girl whom Peter loves

しかし、関係節であることを示す形式 (= 標識) があるかどうかと修飾節中に主名詞 (もしくは代名詞) が残留しているかは、論理的には異なる特性である。特に後者は主名詞(N)と修飾節(Rel)の関係を標示する方法の1つに過ぎず、これを仮に関係標示(CM)⁶と呼ぶなら、前者は、周辺にある節が主名詞(N)に対する修飾節(Rel)であることを標示する関係節標示(R)と呼べばよいであろう。関係標示(CM)や関係節標示(R)は、修飾節(Rel)と主名詞(HN)の境界部 (= 接点) に特定の形態として実現されることが想定されるが、修飾節(Rel)の内部や境界部以外の末端にあってもよく、(形態論的に明示性の高い標識でなくても) 音韻的な方法や意味解釈に関わる方法でも実現可能である。(5)に示すのは、単純な典型例に過ぎない。関係標示は、当該言語の持つ格システムとの共通性 (少なくとも平行性) があることが、言語経済性から想定されるが、これは絶対的なものではない。

(5) {…修飾節(Rel)…} 関係標示(CM) 関係節標示(R) 主名詞(HN)

論理的な可能性を考えれば、関係節標示(R)がある(A-2)かない(A-1)か、関係標示(CM)がない(C-1)かある(C-2)か、ある場合、関係節内(C-21)か関係節外(C-22)か、関係節内にあるとき、それは代名詞(C-211)か倚辞や接辞(C-212)か、語順(C-213)か、関係節標示と関係標示が融合しているか(C-222)かしていない(C-221)か、などで場合分けすることができる。主名詞(HN)についても、ある(N-2)のが普通だが、一般名詞(N-21)か代名詞類(N-22)か倚辞・接辞類(N-23)か、が想定され、ない(N-1)場合も、形態素がない(N-11)のか、ゼロ形態(N-12)なのか関係節標示と融合(N-13)が想定される。これを簡便な表にまとめると表1のようになる。

⁶ 関係は主に格(case)であるが、厳密な「格」関係以外も含む広い概念として用い、便宜上 CM と表す。

日本語は関係標示(CM)も関係節標示(R)も形式的になされず、専用の形態も持たない R1-C1 タイプである⁷。英語などでは、時に関係標示(CM)も関係節標示(R)が分離されるが、時に関係標示(CM)は関係節標

表 1 : 関係節構造の形式的タイプ

示(R)に融合されるので、R2-C222 タイプだが、倚辞(前置詞)を自立的に用いることがあり、R1-C221 タイプも併存し、主名詞を併呑した R1-C222-N13 タイプも用いていることになる。英語は、関係標示(CM)に主節の場合と同じ前置詞を

関係節標示(R)	なし(R1)		
	あり(R2)		
関係標示(CM)	なし(C1)		
	あり(C2)	関係節内(C21)	代名詞(C211)
			倚辞・接辞(C212)
		語順(C213)	
	関係節外(C22)	自立的に存在(C221)	
Rに融合(C222)			
主名詞(HN)	なし(N1)	形態素がない(N11)	
		ゼロ形態素(N12)	
		Rと融合(N13)	
	あり(N2)	一般名詞(N21)	
		代名詞(N22)	
		倚辞・接辞(N23)	

用い、主格・属格・対格は関係節標示(R)に関係標示(CM)を吸収した関係詞⁸を用いるという点で、格システムとの厳密な共通性と平行性を持っている。

- (6) Rel {先週この書店で花子買った} —CM^ヲ—R^{トコロノ} N^{辞書}
- (7) Rel {先週この辞書を花子買った} —CM^ヲ—R^{トコロノ} N^{書店}
- (8) N^{the bookstore} CM^{at} R^{which} Rel{Hanako bought this dictionary last week}
- (9) N^{the bookstore} CM+R^{where} Rel{Hanako bought this dictionary last week}
- (10) N^{the dictionary} CM R^{which} Rel{Hanako bought at this bookstore last week}
- (11) N/R^{what} CM Rel{Hanako bought at this bookstore last week}
- (12) Rel {先週この書店で花子買った} N^{辞書}
- (13) Rel {先週この辞書を花子買った} N^{書店}

英語の *which* は主格(Nom)か対格(Acc)でいずれであるかは関係節で欠落している名詞句の格を参照しなければならない。また、主名詞が非有生(inanimate)なら *which*, 有生(animate)なら *who* (主格)・*whom* (対格) と意味的に分岐しているが、属格(Gen)については有生性(animacy)に関わらず *whose* を用いるなど中和が見られる。(9)の *which* は形態上対格であろうが、前置詞が対

⁷ 従って Song(2001)の言うように *obliteration* が生じているが、これは CM も R も消去されているということになる。ただし、関係標示は主節では行われているので関係節化の過程で「消去」されたと言えるが、関係節標示はなされないだけであって厳密には「消去」と言えない。

⁸ 学校文法などでは、パラダイム記述に基づいて関係代名詞(relative pronoun)とするが、単なる代名詞とすべきかは再考を要すると思われる。

格を要求するので、which 自体は関係節と主名詞の格標示には関与していない（前置詞句内の名詞として対格が要求されているだけで、節内の関係標示は倚辞がになっている）。また関係節を参照しても欠落している名詞句はなく格を同定できない。

2. 「外の関係」の概念性

日本語は、関係標示(CM)が形式的に行われないので、主名詞(N)と修飾節(Rel)の統語的・意味的關係が形式だけでは確定しない。寺村(1993)の言う内の関係と外の関係の区分を以下のように整理し直したとしても、概念的には定義できるが、区分の基準が明確になるわけではない。

- (14) 関係節構造における「内の関係」とは、主名詞が関係節に対して格助詞で標示できる意味関係を有していることであり、そうでないものを「外の関係」と言う。

内の関係と外の関係はある程度直感的に判断できそうな重要な区分であり、英語などを鏡にして日本語を捉えるとき、重要なポイントである。しかし、これには以下のような問題がある。

- (15) 形態格が標示されない以上、内の関係でもいずれに格助詞による関係なのか同定できないことがある。「内の関係」であることと、内の関係の実質が同定できることは別である。
- (16) 内の関係と外の関係を判断する格助詞の基準が不明確。適格文と非文の間にある疑非文(?/??)の扱いや、複合格助詞の扱い。
- (17) 関係節が複数あるとき、主名詞直前の関係節は連体修飾節でなければならないが、それ以外は副詞節（連用修飾節）でもよいこと。
- (18) 外の関係をなす場合に、語用論的な解釈の偏りが見られること。

以上を踏まえて、加藤(2003)では、内の関係と外の関係は連続的な移行域があるとした（加藤 2003:216-218）。⑧は除外する。なお、以下の CM は形態論的標示でなく、格役割・格関係など意味的な関係を便宜的に表している。解釈の語用論的な偏りについては、後節で触れる。

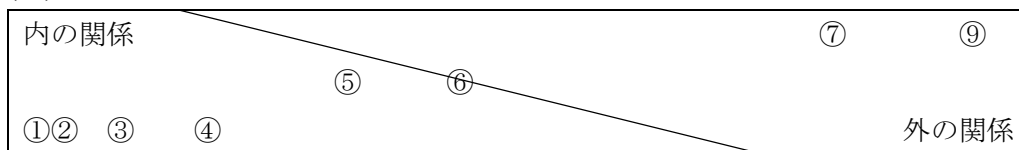
- ①CM が格助詞で一義化できる。
- ②CM は複数の（基本）格助詞⁹が想定できる。
- ③CM は格助詞が想定されるが、述定ではハが自然である。
- ④CM は（基本）格助詞と複合格助詞から複数が想定できる。
- ⑤CM は格助詞が想定できるが、動詞句を補う方が自然である。
- ⑥CM に基本格助詞は想定されないが、複合格助詞が想定される。
- ⑦CM に格助詞は想定されないが、動詞句を補うことはできる。

⁹ ここでは、学校文法で言う格助詞（現代語だけを共時的に見たとき複数の形態素に分解されず、単一の形態素と見なされるもの）を基本格助詞と呼び、複数の形態素の融合と文法化を伴う複合格助詞と対比する。前者が一次的な格関係（その内部にも階層あり）であれば、後者は二次的な格関係と見なす（加藤 2006:72f）。

⑧CMに格助詞は使いにくい~~が、ハをつかって有題文がつくれる。~~

⑨CMが助詞や動詞句で想定できない。

(19) 外の関係と内の関係の連続性



- (20) 遅刻した学生 →その学生が遅刻した (①)
 (21) 先週花子が辞書を買った店 →その店で/その店から (②)
 (22) 書くものがない →「それで書く」なら筆記用具, 「それに書く」ならノート類, 「それを書く」なら素材やアイデア (②)
 (23) 鼻が長い動物 →その動物 {は/?が} 鼻が長い (③)
 (24) 佐藤先生が文句を言っていた規則改定 →その規則改定 {に/について} (④)
 (25) 頭よくなるパン →そのパン {で/を食べると} (⑤)
 (26) 山田先生が注意を喚起したポイント →そのポイントについて (⑥)
 (27) 夜一人でトイレに行けなくなる怪談話 →その怪談話 {*/で/を聞くと} (⑦)
 (28) 十分な議論なしで新制度が導入された結果, 現場はひどく混乱した。(⑨)
 (29) 先日太郎が買った, すぐ調子が悪くなるパソコン (CMの混在)
 (30) 花子が1年かかって書き上げた, 学会から表彰された論文 (CMの混在)
 (31) 花子が1年かかって書き上げた, 学会から表彰された論文(連体+連体, CM混在)
 (32) 花子が1年かかって書き上げ, 学会から表彰された論文(連用+連体, CM混在)

3. 主名詞の位置

日本語の関係節は、修飾節(Rel)が主名詞(N)の直前に置かれるが、これは修飾部が被修飾部に先行する左方展開の特性と一貫した現象と見ることができる。「事前に準備してあった地図」は典型的な Rel+N の関係節であるが、「地図を事前に準備してあったの」のような構造を「地図」という主要部を修飾節がその内部に含みながら「の」という主名詞を修飾すると見れば主要部内在型関係節(internal-head relative)と言うことになる。これは、R1-C1-N22あるいはR1-C1-N23と見ることになる(「の」が形式名詞なら前者、準体助詞のような機能辞と見れば後者)。この場合、「の」は主名詞でなく関係節標示の要素(R)とする立場もあり得るが、この立場はとらない。

- (33) Rel {事前に準備してあった} N 地図を取り出す
 (34) Rel {地図を事前に準備してあった} N のを取り出す
 (35) Rel {地図 {の/で} 事前に準備してあった} N {の/もの/*地図}を貸した

- (36) 限りとて N わかるる道の Rel {悲しき} にいかまほしきは命なりけり (『源氏物語 桐壺』) → 「Rel {悲しき} N わかるる道」

「地図の、事前に準備してあったもの」は、「地図であり、事前に準備してあった X」のように、二重に修飾していると見れば、累加ではなく同格と考えるべきであろう。ほかに、「わかるる道の悲しき」などを「N の Rel」と扱って関係節の一種と見る考えもあるが、これは日本語の関係節に含めないことが多いのではないだろうか。少なくとも、「悲しき」が連体形の名詞化であるとすれば、「別れの悲しき」のような構造と大差がない。主要部内在型関係節は、「ネギ」と「ネギを細かく刻んだもの」は外延としても指示対象としても完全に同一にならない。

- (37) Rel {ネギ_iを細かく刻んだ} {もの_i/の_k}

これが「細かく刻んだネギ」を指し、それと「ネギ_i」とに物理的同一性はあっても、意味的同一性を認めるべきかは議論の余地がある。

4. 外の関係の解釈と成立

日本語は、関係節標示の形式 (関係詞) (R)を持たないだけでなく、関係標示(CM)の形式も持たない。このため、格システムとの共通性や平行性が低いと予想される。寺村秀夫(1993)で「外の関係」と呼ばれるものは、おおむね装定を含む関係節を述定としての主文に転換する際に適当な格助詞がないような関係節である。「サンマを焼くにおい」は、「(その) におい ■さんまを焼く」で■に何らかの格助詞を入れても適格な転換文にならない。

- (38) Rel {秋刀魚を焼く} N 男
 (39) Rel {秋刀魚を焼く} N におい
 (40) その男が, {秋刀魚を焼く}。
 (41) * そのにおいで, {秋刀魚を焼く}。
 (42) そのにおいを出しながら, {秋刀魚を焼く}。

外の関係が可能な言語は日本語以外にも報告されており、通言語学的に見ると、希有なものではない。また、外の関係か内の関係かを厳密に見分けることは、①関係標示(CM)が完全に消去されており、復元の妥当性が確認できないことがある、②「格助詞」を使って復元するという基準の根拠が恣意的、などの理由で難しい。

- (43) Rel {秋刀魚を焼いている} N 煙
 (44) Rel {何かが窓ガラスにぶつかった} N 音
 (45) * その煙が, {秋刀魚を焼いている}。
 (46) * その音が, {何かが窓ガラスにぶつかった}。

- (47) 「この煙は、たき火でもしてるのかな」「違うよ。その煙は、秋刀魚を焼いているんだよ」
- (48) 「いま、何か音がしたね?」「うん。その音は、何かが窓ガラスにぶつかったんだろう」

久野暲(1973)は、関係節における主名詞(N)と修飾節(Rel)の関係が、主題文における主題(T)と叙述の関係と平行性を持つことを指摘している¹⁰。

従来、外の関係に分類されてきたものを加藤(2003)は、3タイプに分け、①随伴物、②位置関係の基準明示、③命題内容の具体化、としている。命題内容の具体化は、他言語では主名詞の命題内容を同格的に示すものとして、関係節に分類しないことも多いが、日本語は、関係詞を持たないだけでなく、同格節の標識となる形態も持たないため、形式的に区別することはできない。位置関係を表す「横・前・隣・そば・下・近く・先」などは、何を基準にして「横」なのかを示さないと、正確に解釈されない。このため基準を示して限定を成立させるものとして修飾節が用いられることがあり、これは西山(2003)に言う非飽和名詞句に分類される。これらの相対的な関係を示す名詞句の限定は関係節によらずともよく、主節として先行している文でもよい。

- (49) Rel {歌手 A が引退する} N 噂 は以前からあった。
- (50) * 噂で、歌手 A が引退する。
- (51) 噂では、歌手 A が引退するらしい。
- (52) * Rel {歌手 A が引退するらしい} N 噂 は以前からあった。
- (53) Rel {千代大海が横綱に昇進する} N 可能性 はある。
- (54) * その可能性は、千代大海が横綱に昇進する。
- (55) Rel {太郎が一生懸命に勉強している} N 横 で花子はゲームをやり始めた。
- (56) # その横で、太郎が一生懸命勉強している。
- (57) 太郎が一生懸命に勉強してい {る／た}。横で花子はゲームをやり始めた。
- (58) Rel {中央線が走る} N 下 で太郎は小さな飲食店を営んでいる。
- (59) * その下を中央線が走る。
- (60) 太郎は小さな飲食店を営んでいる。その上を中央線が {走る／走っている}

加藤 2003 は、①随伴物を修飾節の事象に先行して存在・発生する原因随伴物(①A)、修飾節の事象と同時（開始限界と終了限界のあいだ）に発生する過程随伴物（①B）、修飾節の事象の完了後（終了限界のあと）に発生する結果随伴物（①C）に分けて、A 原因随伴物は原因・理由を表す格助詞が日本語にあることから外の関係にならず、B 過程随伴物と C 結果随伴物は、それ

¹⁰ 加藤(2003)に言うように、この平行性は完全なものではなく、文脈のあつらえなどの語用論的な条件や、文末にノダ等を出現させるなど一定の条件はあるものの、おおむね平行性が確認できる。加藤(2005)では、主題文で用いるハを一定条件下でガに変えられるので、ガの意味機能を広く捉えるという方策をとる。

らを表す格助詞が日本語に存在しないことから外の関係になると見る。つまり、意味的区分と統語的格関係による区分は一致しない点がある。また、モダリティ助動詞類の有無が述定文への転換の際に変わる点を見ると、関係節では、主節において要求されるテンス・アスペクト・モダリティについての標示がゆるく、命題内容だけで許容される面があると見ることもできる。

- (61) Rel {ドル安が進行する} N **要因** はアメリカ経済の脆弱さである。(原因随伴物)
 (62) **その要因**で, {ドル安が進行する}。
 (63) Rel {眠くなる} N **風邪薬** は運転前には飲まないでください。(原因随伴物)
 (64) **その風邪薬**で, 眠くなる。→「で」よりも「が」「は」のほうが自然
 (65) Rel {肉を焼いている} N **におい** が漂っている。(過程随伴物)
 (66) * **そのにおい**で, 肉を焼いている。
 (67) Rel {雑誌を買った} N **おつり** を募金した。(結果随伴物)
 (68) * **そのおつり**で, 雑誌を買った。←前文を主文転換場合の判断

主題文以外にも、修飾節を主文にし、「そのN」という形の主名詞を導入すると、Bでは一般に成立する。Cはやや不自然さがあるが、不適格とはしがたい。Aでは成立しないことがある。

- (69) {太郎たちが肉を焼いている。} **そのにおい**は… (B)
 (70) {私は雑誌を買った。} ?**そのおつり**は… (C)
 (71) {私は眠くなった。} ???**その風邪薬**は… (A)

これらは、連想照応と見てもよく、(B)では「その」がなくても成立しうる(→太郎たちが肉を焼いていた。においにつられて花子たちが集まってきた。。「肉を焼くとにおいが発生する」ことは私たちの世界知識の中にかなり共有度の高い知識として収蔵されているが、「雑誌を買うと、おつりが生じる」ことはあるものの、おつりが生じないこともあるので、「雑誌の購入」から「おつり」が活性化する可能性は低い。「眠くなる」ことと原因として結びつきやすいのは「睡眠不足」や「疲れ」や「睡眠薬」であって、「風邪薬」のなかには眠気を催しにくいものもあるため、活性化の優先順位は低い。とすれば、活性化の度合いは、現実世界に関する知識(=世界知識)を参照して、決まると考えることができる。加藤(2004, 2011, 2016a, 2017)では、文脈に「形式文脈」「状況文脈」「知識文脈」を立て、知識文脈に深く関わるものとして世界知識を位置づけ、おおむね以下のように説明する。Givón(2001:176)ではエピソード記憶のアクセスとして規定しているが、世界知識はもっと広く膨大な記憶領域を利用すると考える。

- (72) 世界知識は、会話参加者がセッション開始以前から有する知識の総体で、長期記憶内に構築された永続的記憶群である¹¹。世界知識は不断に更新され、個別特殊な

¹¹ 長期記憶内にある言語使用と関わる記憶体系には世界知識と言語知識が想定される。ラネカーは両者の区分は理論上の仮構物だとして統合的に encyclopedic knowledge と扱う(下記参照)。加藤(2004, 2011, 2016a, 2017)も最終的に両者を分離することはできないとしながらも、分離して議論したり分析したりすることが可能な場

ものから一般普遍なものまでさまざまな知識を含む、有機的な合理体系をなす。理論上容量に限界はないが、利用できる状態に活性化できる容量には制限があるため、世界知識の全体が知識文脈に転送されているわけではない。

世界知識では、「風邪薬を服用すると眠気を催す」のような単純な記述ではなく、「風邪薬の中には服用後に眠気を催すものがある」のように、可能性や見込みも含む記述として情報を収蔵すると考える。

5. 修飾節内の残留要素

日本語では、修飾節内に名詞+格助詞などが残留することがある。一般に、格関係を明示するために用いられるが、格関係が明確な場合には残留は成立しにくい。また、日本語において同格表現と関係節が形式的に違わないことも残留を容易にしている。

- (73) Rel {子どもの頃, そこから花火を見た} N 小高い丘
 (74) * Rel {その人が迷子の太郎を自宅まで送り届けてくれた} N 親切な大学生

日本語は格関係を含めて関係標示がなされないが、比較対象の「より」では関係節化がしにくい。これは、Keenan and Comrie(1977)が言う Accessibility Hierarchy にあ合致する。ただし、日本語では複数の格助詞が想定可能で、その場合より上の階層の格助詞での解釈が優先する。

- (75) SBJ(主語)>DO(直接目的語)>IO(間接目的語)>OBL(その他の格)>GEN(属格)
 >OCOMP(比較の対象)
- (76) Rel {太郎が結婚した} N 女性 ←相手のト格
 (77) Rel {太郎が一緒に食事をした} N 女性 ←連れのト格
 (78) Rel {会議が始まった} N 時間 ←二格がカラ格に優先
 (79) Rel {この商店が営業している} N 時間 ←二格がマデ格に優先
 (80) Rel {かぐわしい花の香りが漂ってくる} N 庭 ←二格がカラ格に優先
 (81) Rel {説明会に学生が最も多く参加した} N 大学 ←カラ格以外にガ格も
 (82) Rel {祖父が昔の写真を出してきた} N 引き出し ←カラ格
 (83) Rel {全員がスタート地点から走り続けた} N 思い出のゴール地点 ←マデ格
 (84) * Rel {太郎のほうがもっと痩せている} N クラスメイト ←比較対象のヨリ格
 (85) Rel {父親が眼科医をしている} N 友人 ←ノ格

ヨリ格も主題文で成立すると多少受容度が挙がるが、残留させることもできそうだ。

合も少なくとも、可能な限り区別して扱うという立場をとる。The distinction between semantics and pragmatics (or between linguistic and extralinguistic knowledge) is largely artificial, and the only viable linguistic semantics is one that avoids such false dichotomies and is consequently **encyclopedic** in nature. [Langacker. 1987:154]

- (86) ?? Rel {花子のほうがかなり痩せて見える} N 友達 ←ヨリ格だが、「その友達は…」も
 (87) Rel {その人より花子のほうがかなり痩せて見える} N 友達

6. 関係節への語用論的制約

一般に共同格のトは、必須の共同行為者 (→相手) であればそのまま関係節化でき、任意の共同行為者 (→連れ) であれば関係節中に「一緒に」などの連用成分を補う必要があるとされる。

「相手」のように、主名詞が必須の共同行為者を意味する場合もあるが、そうでない場合は、この原則が多くの場合に適用されているかに見える。

- (88) Rel {太郎が昨夜レストラン F で食事をしていた} N 女性
 (89) ?? Rel {太郎が学食で B 定食を食べた} N 女性
 (90) Rel {太郎がキャッチボールをした} N 友達
 (91) ? Rel {太郎が打撃練習をした} N 友達
 (92) ?? Rel {太郎がシャドウピッチングをした} N 友達
 (93) ?? Rel {太郎が壁打ち練習をした} N 友達
 (94) ? Rel {太郎が壁打ち練習をした} N パートナー

これらは共同格を必須共同格と任意共同格に下位分類して記述してもある程度受容度の予測はできるものの、最終的には世界知識によると考えるべきだろう。

いわゆる外の関係のうち、統語構造としては変わらないのに、成立しない (成立しにくい) のが見られることは、知られている。

- (95) Rel {米子に泊まった} N 翌朝には…
 (96) * Rel {夜遅くお風呂に入った} N 朝は、肌寒く感じる。(白川 1986:10)
 (97) Rel {夜遅くお風呂に入った} N 翌朝…
 (98) Rel {前夜遅くにお風呂に入った} N 朝…
 (99) Rel {夜明けにシャワーを浴びた} N 夏の早朝…

「夜遅くお風呂に入った」ことと、その後に夜が明けて訪れた「朝」の関係が世界知識を参照しても明確にならないと不自然であり、「翌朝」や「前夜」を用いて、日にちの前後関係が明確になれば成立しやすい。「夜明け」と「早朝」であれば、隣接性があり、経時性と前後関係が明確になりやすく、白川(1986)はこの点を「連続性の条件」として説明しているが、前後関係が世界知識の参照から明らかになるかに含めて説明できるだろう。

- (100) Rel {キャベツを千切りにする} N もの…
 (101) Rel {キャベツを千切りにした} N もの…

これらは、前者では、包丁や調理器具などと考えやすいのに対して、後者では、千切りにしたキャベツとする解釈が優先する。道具としての解釈であれば、「これでキャベツを千切りにする」のように具格「で」で開けるので外の関係ではない。これは世界知識のなかで、キャベツを刻む作業の前にはその遂行のために道具が重要になり、作業の後には、変化したキャベツ（の存在形態）が重要であることから説明できるだろう。一方、世界知識を参照しても、主名詞が関係節の表す事態のなかにうまく位置づけられないときには、関係節構造も成立しにくい。

- (102) ? Rel {次郎が富士山をスケッチする} N もの・・・
 (103) Rel {次郎が富士山をスケッチした} N もの・・・
 (104) * Rel {太郎が椅子にすわった} N もの・・・
 (105) ? Rel {花子がミドリムシを観察した} N もの・・・
 (106) * Rel {加害者が被害者を花瓶で殴打した} N もの・・・
 (107) Rel {加害者が被害者を花瓶で殴打した} N 傷・・・
 (108) Rel {加害者が被害者を花瓶で殴打した} N 結果・・・

7. 統語的制約としての記述

形式論的に、格関係の重複が許容されないという制約の可能性を検討する。例えば、英語の関係節では関係詞が関係節中で目的語であれば、目的語は欠落しなければならないが、日本語でも同様の制約を立てられるだろうか。

- (109) * Rel {花子が太郎を蹴飛ばした} N {人/もの}・・・
 (110) Rel {iが太郎を蹴飛ばした} N 人_i・・・
 (111) Rel {花子がiを蹴飛ばした} N 人_i・・・
 (112) * 加害者が利き手で花瓶で被害者を殴打した。
 (113) Rel {加害者が利き手で被害者を殴打した} N 花瓶・・・
 (114) 加害者が大通り公園で花瓶で被害者を殴打した。
 (115) ? 太郎が息子を公園中を探し回った。
 (116) Rel {太郎が息子を公園中を探し回った} N 公園・・・
 (117) Rel {太郎が公園中を息子を探し回った} N 息子・・・
 (118) ? 太郎がその馬を A 寺の山門をくぐらせた。
 (119) Rel {太郎がその馬をA 寺の山門をくぐらせた} N A 寺の山門・・・
 (120) Rel {太郎が A 寺の山門を馬をくぐらせた} N 馬・・・
 (121) 赤鬼が目がつり上がっていることは・・・ →赤鬼は目がつり上がっている
 (122) Rel {目がつり上がっている} N 赤鬼・・・
 (123) * Rel {赤鬼が目がつり上がっている} N 目・・・
 (124) * 太郎がその 400m トラックを第 2 レーンを走った。

- (125) Rel {太郎が第2レーンを走った} N^{400mトラック}…
- (126) * Rel {太郎がその400メートルトラックを走った} N^{第2レーン}…
- (127) 太郎がその400mトラックの第2レーンを走った。

加藤(2003)では、関係節と主名詞の関係について、「意味役割の重複制限」という統語的な規則を立てているが、これが成立するには、日本語において同一形態格が多重化しない原則があればよいが、日本語では二重主格は可能であり、二重ヲ格も厳密な制約にはなっていない(加藤2013では、日本語における二重ヲ格制約は、表層における形態論的制約ではなく、意味解釈に関わるもので、語用論的な制約に過ぎない、としている)ことから、形式的に重複制約を定めるべきではない。意味格と連動する意味役割を設定することは可能だが、格関係を消去した関係節構造では、形態格の二重性に対する違和感は緩和されると考えられる。また、構造の階層性は考慮すべきと思われるが、機会を改めたい。

8. まとめ

参考文献

- 加藤重広(1999) 「日本語関係節の成立要件(1)」『富山大学人文学部紀要』30, pp.65-111
- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房
- 加藤重広(2005) 「基幹格としての「が」とその特性 —日本語格助詞試論(1)—」『富山大学人文学部紀要』42, pp.11-22
- 加藤重広(2006) 『日本語文法入門ハンドブック』 東京:研究社
- 加藤重広(2011) 「世界知識と解釈的文脈の理論」『北海道大学大学院文学研究科紀要』134号, pp.69-96
- 加藤重広(2013) 『日本語統語特性論』 札幌：北海道大学出版会
- 加藤重広(2016a) 「総説」加藤重広・滝浦真人編『語用論研究ハンドブック』ひつじ書房, pp.1-47
- 加藤重広(2016b) 「統語語用論」加藤重広・滝浦真人編『語用論研究ハンドブック』ひつじ書房, pp.159-185
- 加藤重広(2017) 「文脈の科学としての語用論」『語用論研究』19, 日本語用論学会 (2017年2月予定)
- 久野暉(1973) 『日本文法研究』 東京：大修館書店
- 白川博之(1986) 「連体修飾節の状況定時機能」『言語学論叢』5, pp.1-16, 筑波大学一般応用言語学研究室
- 寺村秀夫(1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学, 寺村(1993:157-207)
- 寺村秀夫(1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味—その2—」『日本語・日本文化』5, 大阪外国語大学, 寺村(1993:209-260)
- 寺村秀夫(1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」『日本語・日本文化』6, 大阪外国語大学, 寺村(1993:261-296)
- 寺村秀夫(1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」『日本語・日本文化』7, 大阪外国語大学, 寺村(1993:297-320)
- 寺村秀夫(1993) 『寺村秀夫論文集I —日本文法編—』くろしお出版
- 西山佑司(2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京：ひつじ書房
- Givón, Talmy(2001) *Syntax II (revised edition)*, Amsterdam: John Benjamins
- Keenan, Edward L. And Comrie, Bernard(1972) “Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar”, unpublished, King’s College, Cambridge
- Keenan, Edward L. And Comrie, Bernard (1977) “Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar”, *Linguistic Inquiry* vol.8 no.1 MIT Press, pp.63-99
- Langacker, Ronald W.(1987) *Foundations of Cognitive Grammar volume I, Theoretical prerequisites*, Stanford: Stanford University Press
- Song, Jae Jung (2001) *Linguistic Typology: Morphology and Syntax*, Essex: Pearson Education / Longman